

中国の人々を傷つける歴史認識

— 「ピースおおさか」の展示リニューアル問題

元 ピースおおさか（大阪国際平和センター）専門職員 常本 一

加害展示の撤去

大阪城公園の一角にある、大阪府・市共同出資の平和博物館「ピースおおさか」。開館以来 20 数年を経ているため、2015 年 4 月に展示リニューアルオープンしたものの、その際、過去の日本による「加害展示」が撤去されたことが今、大きな問題となっている。そのピースおおさかを 2016 年 3 月 6 日、日中友好協会大阪府連合会主催の定例研究会として、筆者のガイドで見学会を行なう機会があった。その結果、単に「加害」を隠しただけではない、様々な問題点を明らかにすることができたが、それは後段に述べるとして、そもそも、なぜ「加害展示」の撤去が問題であるのかを説明することから稿を起こしていきたい。

ピースおおさかはその旧展示において、大阪大空襲などの日本の被害を展示するだけでなく、朝鮮人強制動員、南京大虐殺、重慶爆撃などの、日本の加害をも展示する、いわゆる両面展示をグランドコンセプトとしてきた。その理由は、一方的な戦争の見方を排し、被害と加害がない交ぜになっている戦争の本質を展示するためには不可欠な方法論であったからだ。

例えば、ピースおおさかが大阪空襲だけを展示する博物館であったなら、日本の子どもたちからは「大阪を焼け野原にするなんて、アメリカは何て悪い国だろう」。他方で、アメリカ人の来館者からは「この悲惨な空襲は日本が始めた戦争の帰結じゃないか」という類の感想が残されてしまう可能性は否めない。実際に初期の広島・長崎の原爆資料館において少なからず見られた、そのような一方的な見地からの感想。それを無くすための切り札として、「加害・被害の両面展示」は企画されたわけである。そして思惑通り、筆者の現役時代には、その一方的で平和に資することのない感想文はほとんど姿を消すという成果を挙げたのだった。

しかし、その展示法の中で加害の部分が保守層から「反日・自虐展示」との誤解を招き、右翼による攻撃を受けることになった。特に 1997 年頃より、「靖国派」の議員からの圧力が加わり始める。筆者はその頃、視察の議員から「こんな自国の恥を展示する博物館なんて、世界中のどこにもないぞ！」と面と向かって言われた記憶がある。確かにそうだが、むしろなぜそのことを誇りに思わないのか。一職員に過ぎない筆者が直接反論することはできなかったが、そう心の中でつぶやいていたことも覚えている。

すなわち、ピースおおさかによる加害展示とは、まさにその議員が言うように、世界のどこにもない、つまり時代の最先端を走っている、誇るべき平和憲法である日本国憲法と同じく、発想を転換させたものに他ならないのである。戦争の本質を展示するために敢えて恥をさらすピースおおさかは、相手を信じることによって自らの安全を保とうとする日本国憲法とパラレルであるといえる。もちろん、その意味では「特異」なものであり、それゆえ誤解も受けるが、しかしそれは多くの犠牲者を出した先の大戦からの教訓によって導かれたものであることはいうまでもない。

しかしながら 2016 年現在、安倍政権の下、日本を他国と対等な軍事同盟を結べる「普通」の国に戻そうとする大きな流れが渦巻いている。その中で、安倍首相とともに「改憲タッグ」と

称される、橋下大阪市長（当時）が今回の加害展示の撤去を強行したことが、何にも増して問題といえるのだ。ピースおおさかの問題は大阪にある一平和博物館の問題では決してない。その展示改悪をこのまま許すことは、そのまま憲法 9 条の危機につながるといっても過言ではないだろう。

右翼が起こした大阪事件

1997 年頃より始まった右翼によるピースおおさかへの攻撃は年々激しさを増していったが、その極に達したのが、2000 年 1 月にピースおおさかの講堂（300 人収容）で右翼が開催した、「20 世紀最大の嘘・南京大虐殺の徹底検証」集会であった。講師は東中野修道。1937 年の南京での大虐殺は中国のプロパガンダ、つまり嘘であり、捕虜の合法的処刑はあったものの、民間人には手を下していないとする、歴史歪曲の学者である。本稿では彼の説を詳しく批判する紙幅はないが、兵士と民間人を峻別する手段などあろうはずもないことを指摘するだけでも足りるほど、愚にもつかない説であることは今更いうまでもないだろう。

そのような南京大虐殺を完全否定する集会であっただけに、事前に中国駐大阪総領事館や華僑団体などから、右翼への講堂の貸し出し中止を求められたものの、ピースおおさかを所管する行政の政治的消極主義により集会の開催を余儀なくされた。すると、この一件は平和博物館が行なったものであるだけに、反響が反響を呼び、ついには外交問題となって、当時の青木幹雄官房長官がコメントをする事態に。そして中国では「大阪事件」と呼ばれるほどの騒ぎになってしまったのである。

中国の人々からの、ピースおおさかに裏切られたとの思いが、そのような「事件」という受け止め方となったのであろう。集会からほどなく、抗議のために上海電視台と共に来阪した、朱成山南京大虐殺記念館長と最初に対応したのは筆者であったが、怒りに目がつり上がっていた朱氏の顔が今でも脳裏から離れない。この事件を期に、それまで毎年のようにゲストとしてピースおおさかを訪れていた中国の人々（その中には郭沫若の秘書だったという方もおられた）が、全くその訪問を取りやめてしまったことは、悲しく辛い出来事であるだけでなく、日中友好の観点から平和博物館としては取り返しのつかない汚点となった。

これ以後、ピースおおさかはいわゆる貸館（講堂）・貸室（展示室、会議室）事業を停止し、それまで広く交流のあった平和を願う市民団体からも距離を置くようになる。また、ピースおおさかの主催、つまり独自で行なう特別展やイベントについても、歴史認識が入り込まないような無難なものを選ぶようになり、「加害」をテーマにしたものなど一切できなくなってしまった。これらのことが、まさに右翼の思う壺であったことはいうまでもないだろう。

大阪維新の会からの攻撃

これまで見てきたように、右翼からの攻撃はたびたびあったものの、2009 年の統一地方選挙で勝利した大阪維新の会からの攻撃は、それまでとは次元が違くと表現せざるをえないほど、激しく決定的なものとなった。それは維新が初めて大阪府議会で過半数を占め、ピースおおさかがほぼ 100%依存している、府・市からの補助金の廃止をちらつかせながらの圧力であったからだ。つまり、その時以来、橋下・維新の言うことには何も逆らえなくなったというわけである。

その代表例が、2011 年 10 月 29 日付の産経新聞で大きく報じられた、いわゆる二セ展示問題である。それは「朝鮮コーナー」において、朝鮮人強制連行の解説パネルと並んで（しかし

独立して) 展示されていた、朝鮮人の強制労働を示す写真パネルの撮影場所が朝鮮国内であったことが、解説パネルにある「日本に連行して労働に従事させた」の文言と合わないがゆえにニセ展示であるとされたもの。一体全体、そのどこがニセ展示なのか、部内では不満の声が上がったものの、維新の過半数の議席の前には唯々諾々と従わざるをえず、指摘の展示を撤去してしまった経緯があった。

2011 年末の大阪府知事・市長ダブル選挙での維新の勝利以降、さらに攻撃は激しさを増していった。翌年 5 月、橋下市長は、それまで筆者を中心に部内で作成していたリニューアル計画を中止させ、頭ごなしに、加害を展示する(とされる)新設の「近現代史学習施設(仮称)」と、大阪空襲などの被害の展示に特化するピースおおさかとに、棲み分けをするという独断を押し付けてきたのである。これが政治的フェイクでなくて何であろう。府と市で二つあるものはムダだと決めつける橋下・維新が、なぜに平和博物館だけは 1 館から 2 館にするというのか。その真の狙いがピースおおさかから加害展示を撤去させる、その一点にあったことはいうまでもない。(実際、当該学習施設は現在、建設の目処は立っていない)

橋下・維新のピースおおさかに対する攻撃の真の意味は、しかしながら、加害展示の撤去をもって終わるものでは決してないことを理解することが、現下の日本の右旋回する政治状況においては最も重要なことである。先に筆者は安倍・橋下の「改憲タッグ」と書いた。なるほど安倍首相は今では全盛ではあるが、いつかは首相を辞める時がくる。その時、政界復帰しているだろう橋下元大阪市長が後継者となれば、年齢差があるだけに将来に渡って憲法 9 条の危機は続いていく可能性がある。

もう、おわかりだろう。右翼から見れば、「反日・自虐展示」として全国的に知られているピースおおさか。そこから加害展示を撤去した橋下元市長の“功績”は、そのまま歴史認識の分野で安倍首相の後継者となりえる「認定証」を意味しているのだ。それだけに、ピースおおさかの展示改悪をこのまま放置しておくわけにはいかないのである。

リニューアル後の展示の問題点

改変されてしまった展示の問題点は多岐にわたるが、紙幅の関係で要点のみを指摘したい。まず何とんでも、加害の展示がほぼ無くなってしまったこと。「過去に目を閉ざす者は、未来にも盲目となる」というヴァイツゼッカーの名言から何を学んだのだろうか。しかしここまでは、展示しないという、いわば不作為の罪。それどころか、わずかに残った加害展示といえる、日本の侵略(この言葉は皆無)の歴史を概観するビデオ(約 10 分)の中には、作為的なゴマカシや弁解すら数多く見られるのである。

一例を挙げれば、「日本の朝鮮統治に対する抵抗運動が広がる中、日本はその植民地化を進めた」というナレーションの間、二種類の動画が映し出されているものの、両方とも日本の指導で朝鮮の人々が生産活動をしているという、いわば望ましい映像が使われている点。日本の過酷な植民地支配を少しでも緩和して伝えようとする意図が透けて見える。

また、日本の大陸への侵略戦争をできるだけ防衛的に見せるため、「米英やソ連から攻撃されないような仕組みを整えながら、インドシナへと進出していった」などというナレーションも。その「仕組み」とは何と、日独伊三国同盟のことである。その同盟こそ、先の大戦の原因の最たるものではなかったのか。

さらに、問題点はそれらに留まらない。ビデオの中で「通州事件」を取り上げている点が決定

的だ。それにより、わずかに残った加害展示はその意味を失ったともいえる。通州事件とは、中国側による日本の居留民数百名の虐殺事件であるが、南京大虐殺といつも対にして論じられる場合には、しばしば右翼史観と呼ばれるものである。一体、犠牲者数や状況だけでなく、帝国主義的支配をもくろむ日本と、それに抵抗する中国との相違を無視して、同列に論じ、「どっちもどっち」（橋下市長の言）などといえるものだろうか。

果たしてビデオの中では、大きく映し出された静止画の中国の地図に、パワーポイントのように、盧溝橋事件→通州事件→上海事件→南京事件→重慶爆撃と、順に地点を示していき、単に「多くの犠牲者を出した」などというナレーションが重なるだけで、あたかもその暴力の連鎖の一環である通州事件を起こした中国側にも責任があるといわんばかりのつくりとなっていて、まさに右翼史観のそしりは免れない。

多くの中国人観光客でにぎわう大阪城公園内に建つ平和博物館において、まさか中国の人々を傷つけるような展示をしようとは一。筆者の現役時代には想像もできなかったことである。しかも、新設された中国語の音声ガイド（イヤホン方式）には、このビデオのナレーションは収録されておらず、ここにも臭いものに蓋という、展示リニューアルの方針が見て取れるのである。

さらに他のコーナーを見ていけば、安倍政権が進める「戦争できる国づくり」に符合するかのよう、見学の子どもたちに刷り込みをするような危険な展示すらある。入り口に疎開先で小学生が勤労奉仕をさせられているイメージ写真を大きく掲げる、「子どもたちの戦時下の暮らし」のゾーンである。その壁面にはこう記されている。「戦争の時代、子どもたちはどう生きたのか。栄養事情が急速に悪くなるなか、『立派な少国民』として、戦争に協力し、空襲にも、精一杯対応した子どもたちの姿を知ろう」一。

強い違和感を持つのは筆者だけだろうか。親が恋しい年頃に親から引き離され、空腹に苦しめられ、そのはけ口をいじめに求める辛い学童疎開の体験。それらの苦難が、壁面の一文からは全く見えてこない。これではまるで、戦争になれば子どもだからといって守られてばかりいるのではなく、自ら積極的に立派に戦争に協力する必要があるのだと、メッセージを発しているかのようである。展示リニューアル後のピースおおさかを「西の遊就館」と呼称する向きもあるが、あながち間違いとは言い切れないのかもしれない。

再リニューアルへの展望

これまで右翼や大阪維新の会からの攻撃ばかりを見てきたが、もちろん市民の側からの反撃もある。2015年5月の住民投票において、維新の命運を握る大阪都構想を否決した「オール大阪」方式のように、広範な市民が結束し、議員に働きかけ、リニューアルの内容について異議を申し立て続けていた。これらの運動がなければ、リニューアル後の展示には、ひと言の「南京事件」の文言すら入ることはなかったであろう。

さらに、リニューアルオープンの数ヶ月前には府議会において、展示の適正化を求める請願書が維新以外の賛成多数により採択されるなど、あと一步のところまで追い詰めていたのだ。しかし、府・市のトップが維新であることの壁は大きく、改修後の展示は上に述べたように大きな問題点を残すこととなる。

リニューアルオープン後も、それらの問題点をただし、加害展示の復活、つまり再リニューアルを要望する広範な市民の運動は鋭意続けられている。しかしながら、2015年11月の大阪

府知事・市長のダブル選挙において、再び維新が勝利したことにより、再リニューアルの行程表には大きな遅れが生じることとなってしまった。大阪のダブル選は、翌年の国政選挙で戦争法を廃案にする流れをつくり、安倍・橋下「改憲タッグ」を打倒するための闘いの前哨戦であっただけに、平和を望む市民の間に大きな失望と危機感をもたらしたといわなければならない。

結局、ピースおおさかの再リニューアル問題とは、博物館学的な問題ではなく、選挙に勝たなければ始まらないという政治学的なそれであることが、本稿の結論となってしまった。実際にダブル戦後、維新の顔色をうかがうピースおおさかの館長は、市民団体（ピースおおさかの展示に府民・市民の声を！実行委員会）と距離を置き始め、2016年3月現在、交渉を拒否している。上述の請願書が府議会で採択されたにもかかわらず、それに基づいて申し入れをしている市民団体を「1割の声」と決めつけて耳を貸そうとしないのだ。そのあまりにひどい館長の対応は、今後、議会において問われることになるだろう。

最後に誤解を招かないよう、重要な点を指摘して本稿を終えたい。それは結論とは矛盾するようだが、被害だけでなく加害をも展示するという方法論はイデオロギーの問題ではないということである。平たくいえば、左翼と右翼に国論が二分される政治上の問題ではないということ。ある調査によると、「加害展示」に市民の8割が賛成している事実があるからだ。自国の辛い過去ではあるものの、やはり率直に展示すべきという意見は、確かに市民的良識に違いない。日本の場合にはそれがあってこそ、近隣諸国との過去を乗り越えられるのだといえよう。その良識を、橋下・維新の暴政がつぶしたのである。

上に、再リニューアルの行程表に遅れが生じると書いた。しかし、遅れることと諦めることは違う。ピースおおさかが世界で初めて確立した、「加害・被害の両面展示」という平和博物館のコンセプト。その復活を求める歩みは、決して止まることはないだろう。